

### <書評と紹介> 石山徳子著 『「犠牲区域」の アメリカ：核開発と先住民族』

藤川, 賢 / FUJIKAWA, Ken

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

755・756

(開始ページ / Start Page)

133

(終了ページ / End Page)

137

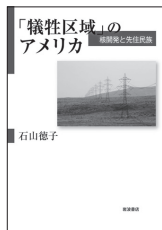
(発行年 / Year)

2021-10

石山徳子著

## 『「犠牲区域」のアメリカ

——核開発と先住民族』



評者：藤川 賢

原子力と放射能は、科学の世紀としての20世紀の幕を開けた一方で、数十年後には「リスク社会」を象徴する存在にもなった。今日でも賛否をめぐる意見が錯綜しているが、大きなリスクを抱えながらも核開発が進められてきた理由の一つとして差別や格差の存在が指摘される。では、なぜ、放射能をめぐるリスク格差は、少なくとも数十年前から明らかであったにもかかわらず長期にわたって続いているのだろうか。

本書『「犠牲区域」のアメリカ——核開発と先住民族』は、この問いに正面から取り組む力作である。著者の石山徳子氏は、アメリカの先住民社会を中心的なフィールドとする政治地理学者として、核開発と環境正義の課題を20年以上にわたって調査・研究してきた。その成果を注ぎ込んだ本書では、「アメリカ地理と核開発の共謀関係」（本書「はじめに」vii頁）が多次的に描き出される。多様な関係者へのインタビューをくりかえし、各種の資料によって事実を確認した記述の信頼性はきわめて高く、アメリカ研究においてはもちろん、先住民、核開発、環境正義などの諸領域を学ぶための必読書であることは疑いない。

ただし、それ以上に本書の魅力を高めているのは、先住民の人たちが抱える多様な葛藤を著者が〈自分ごと〉として、ともに考える姿勢である。安易な結論や感傷を戒めつつ展望される環境正義への考究は深く、現在の日本が抱える多くの問題を考えるためにも豊かな示唆を与えてくれる。以下では、本書の概要を確認しつつ、その示唆の広がりを考えてみたい。

### 1 セトラー・コロニアズムと科学技術の発展——本書の問題提起

序論にあたる一章は、「犠牲区域」によって成り立つ国としてのアメリカの本質を容赦なく浮かび上がらせる。

「アメリカは「移民の国」である、というイメージは、日米両国を含む世界の国々で、ごく一般的だ。が、それは先住民にたいするジェノサイドの歴史を無批判に受け入れている、もしくはこれにたいする無関心を示す考え方でもある。」(p.12 = 本書からの引用は、以下同様にページ数のみ記載)

黒人差別と公民権運動はアメリカを語る上で不可欠の要素として共有されている。だが、先住民社会はより厳しい貧困や差別をめぐる社会問題を抱えているにもかかわらず、それは見えてこない。たとえば警察によって殺される死者の割合は、黒人では人口100万人あたり6.6人であるのにたいして、先住民は同じく10.13人と、さらに多い（ちなみにヒスパニック以外の白人は2.9人）。黒人は「移民の国」の一部として可視的だが、「セトラー・コロニアリズム（入植植民地主義、もしくは定住型植民地主義）の国」としてのアメリカが否定される中で先住民の存在は消されつづける。より強く言えば、入植者をあくまで平和的な存在とする虚構の物

語のために、先住民の存在が隠されるだけでなく、その「滅亡」の歴史さえも不可視化されるのである。

「犠牲区域」は、この延長線上にあり、軍事・科学・社会が先住民の不可視性を補完しあう場である。核実験場に象徴される「犠牲区域」は、科学と国の安全保障のための環境破壊を正当化しようとして用いられてきたが、それが許容された理由の一つに、その場所には（先住民も含めて）誰も住んでいないという前提があった。先住民の生活と歴史が不可視化されていたために、必要な犠牲のために適所が選ばれた、という説明で済んだのである。他方、「犠牲区域」を吟味しないことによって、区域を越境するリスクや、情報公開・安全確保などの開発手続きなども無視したまま核開発が急がれ、冷戦後の今日も多くの人にとって核のリスクは遠方のことであり続ける。無人の砂漠地帯などの地理的イメージと結びついたセトラー・コロニアリズムは、国境を越えて核開発に影響を与えてきた (p.26)。

この指摘の上で、本論部分は、「犠牲区域」の側からのアメリカを描き出すことに専心している。本書タイトルは、先住民社会を「犠牲」と規定するのは外部であって当事者たちがそれを認めていないことを確認すると同時に、「犠牲」にされかけた先住民社会こそ、長い歴史の中では本来のアメリカであり、また、将来のアメリカを守るのではないかと示唆しているようにも読める。

## 2 汚染された土地に生きる人たち

本論にあたる二章から六章では、核開発と先住民社会の関係に関する事例研究が紹介される。主な舞台は、世界最初のプルトニウム製造拠点となったハンフォード・サイト、アメリカ最大規模のウラン開発地区であるナバホ・ネー

ション、アメリカの核実験の過半が行われたネバダ実験場と高レベル放射性廃棄物の最終処分場建設候補地となったユッカ・マウンテン、そして、高レベル放射性廃棄物中間貯蔵施設の建設をめぐる翻弄されるユタ州のスカルバレーである。それぞれについて、開発側が何をしてきたか、先住民社会に何が起り、どう対応したか、とともに、それがどう受け止められてきたか、具体的かつ多面的に描き出される。

著者がくりかえし「一枚岩ではない」と確認するように、地域や部族による違いはもちろん、それぞれの部族の中にも多様な意見がある。したがって、各章で重視されるのは選択の結果ではなく、葛藤を含めた思考の過程であり、多様性の尊重である。

だが、もちろん、葛藤と多様性は厳しい現実とともに存在する。中でも、六章「骸骨の谷から見える未来」で記されるユタ州のスカルバレー・ゴシュート族の事例は、過酷である。スカルバレーは、著者の博士論文における中心的フィールドであり『米国先住民と核廃棄物—環境正義をめぐる闘争』（石山徳子著、明石書店、2004年）でも詳しく論じられているので、あわせてみると現実の厳しさがより冷徹に感じられる。

ゴシュート族は乾燥地帯を広く移動する狩猟採集民族だったが、モルモン教徒の入植者にはほとんどの土地を奪われ、部族政府は小さな居留区に押し込められた。周囲を軍事施設と有害廃棄物施設などに囲まれた居留区の住民たちは、アルコール依存症、家庭内暴力、疾病などに苦しむ。その中で経済開発を進めるために、部族リーダーたちは民間の使用済み燃料中間貯蔵施設の受け入れを決めたが、州政府は、それまで有害施設の集積を推進してきたにもかかわらず核施設の受け入れには反対し、前著では部族政府はそれらへの対抗に追われていた。

前著刊行から10年余の間に、部族政府と州政府との対立は混迷を深め、核施設計画は宙に浮いたまま、部族の分断を厳しくした。本書ではスカルバレー・ゴシュート族は「ますます周縁化され、視えない存在にされ」(p.206)、部族政府の所在さえ不明で、連絡不可能な状態が続いている。

「この部族は30年近くも、巨額の金と利権が絡む原子力産業と関わることによっていったい何を得たのか。つまりは原子力産業に翻弄され、電力会社への依存を深めた当時の部族政府は、もろくも崩壊した。後に残されたのは以前と変わることのない過疎と貧困、そればかりか州政府との関係は、相互不信から悪化し、社会的な孤立を深めただけだった。共同体内部の憎しみはさらに増殖された。」(p.206)

著者も懸念するように、この「闇の奥」から、どのような未来が展開するのかは、分からない。そして、そこにどのような展望を切り開くかは、存続さえ危ぶまれるスカルバレー・ゴシュート族だけの課題ではない。核開発による分断を各地で経験したにもかかわらず、今なお、高レベル放射性廃棄物の行方に混迷し続けている日本の私たちにとっても切実である。

それに関する一筋の希望として、現場からの環境正義について考察された七章は、短いが示唆に富んでいる。

### 3 現場からの環境正義に向けて

不可視化されつづけてきた先住民は、常に受け身の被害者ではない。逆境の中でも声をあげつづける姿勢は、時代や部族の違いを超えて共通している。環境正義は結果を急ぐものではなく、参加、可視化、多様性の尊重を追求する

ものであり、先住民社会の現場からは、その追求を可能にする、年月を越えた連帯と信頼を視ることができる。

たとえばハンフォード・サイト地区では、ワムパム族のリーダーのレックス・バックが、政府が広大な土地を立ち入り禁止の軍事基地にしたからこそ開拓・開発の手から守られて自然の景観が守られた、と語る(二章)。世界最大級の放射能汚染をもたらしたサイト建設がこの土地を守ったという見方は、著者にとっても意外で、一面では「アメリカ先住民の苦難の歴史を反映している」(p.47)。だが、これに続けて著者が述べるように、それはそれよりもはるかに長い歴史に裏打ちされたものでもある。それから2年後の2017年にトランプ政権下での危機感について尋ねられたときにもバックは、すでにすべてを奪われた私たちに彼らが何をできるのかと、次のように自信を示す(三章)。

「私たちはこの土地を守るために生まれ、生きています。それが私たちの生き方、存在のしかたでもあるのです。」(p.98)

政権が変わっても、受け継がれていた自然景観を守るために生き続けることは、政府に翻弄され、多くを失った歴史の中でも守られてきた「揺るぎない」信念の表れでもあり、信念を支える根拠でもある。流動的な近代社会に生きる私たちは、この信念も根拠も失っているが、地球温暖化問題などを抱える今こそ必要な、環境正義を考える基盤なのかもしれない。七章の最後の項目は「10万年後の現場」と題され、ヤカマ・ネーションの環境資源課の責任者で部族のリーダーでもあったラッセル・ジムの言葉を中心に考察される。それは、ハンフォード・サイトの高レベル放射性廃棄物リスクが10万年に及ぶことについて、その危険性を何万年もあ

との人たちにどう伝えるかという会議の席で、彼が連邦政府職員や学者たちにした発言である。

「We'll tell them.……彼らには私たちが伝えます」(p.222)

10万年後も先住民はこの土地で必ず生きているのだ、という自負を受け止めた著者は、次のように本書を結ぶのである。

「私たちの行く手に広がる闇はくらい。ただ、苛烈なジェノサイドの歴史をくぐり抜け、いまもたしかに存在する先住民族が紡いできた、しなやかさと力強さ。大地に息づくすべての生命への、世代を超えた愛情と敬意。これこそが、「闇の奥」にも差し込む、一筋の光なのかもしれない。」(p.223)

#### 4 日本における国内植民地主義と核開発

ここまで概観してきたように、本書はアメリカ先住民社会の現場に立脚するものである。とは言え、本文では自制されているものの、「はじめに」で広島・長崎と水俣病に言及され、「あとがき」では福島、沖縄、アイヌについて書かれているように、現代日本の課題としての環境正義も著者の視野には含まれている。

言うまでもなく、日本の環境問題は地域格差と深く関わり、そこには国内植民地主義的な発想が指摘されてきた。たとえば、青森県六ヶ所村の核燃料サイクル施設立地の前史となる1969年の新全総は、陸奥湾・小川原湖周辺地域を「日本に残された最大のフロンティアの1つ」とみなし、その地域、住民、生業などについてまったく顧慮することなく「むつ小川原開発」を構想した(船橋他1998:15)。下北半島は、原子力開発側にとって「残された最後の

“どうにでもなる土地”」としてしか見られていなかったとも言える(倉沢1988:15)。

ここではセトラ・コロニアリズムと国内植民地主義の異同を論じる余裕はないが、不可視化と核開発との関係について、少なくとも次のような共通点を指摘できる。第一に「フロンティア」との位置づけによって、それまでに存在していた生命、生活、文化が全否定される。第二に、この不可視化とともに空白の土地だから汚染してもいい、という発想が浮かび上がる。「フロンティア」では、通常の社会とは異なる基準・ルールが成り立つかのように、客観的な批判も遮断され、多くの人たちはそうした決定過程にも無関心が続ける。この状態において第三に、不可視化された人たちに最後の選択が迫られる。実際には選択肢がないにもかかわらず、最終的に受容したのは現地の人たちだという手続きによって、「自己責任」だけが現地の人びとに負わされて、開発側の責任は曖昧になっていく。むつ小川原開発で土地を追われた人たちの孤立と困窮と葛藤は、先住民社会の状況と共通する(船橋他前掲書)。今日、福島原発事故によって人口が激減した地域でも、同様の懸念が強まっている。

足尾や水俣などで格差・差別を背景とする無関心が産業主義のリスクを見逃し、地域の中でも被害の潜在化を招いたことは、公害が反省された時代には明らかになっていたはずである。にもかかわらず、高レベル放射性廃棄物処分地などをめぐって「フロンティア」探しが今日まで続いている理由にも、アメリカの「犠牲区域」に重なる一面があるだろう。

#### 5 視ることから始める環境正義のために

環境正義には、分配の正義、過程の正義、認識の正義の3つの概念が含まれる(Schlosberg 2007, Walker 2012)。著者は、一貫して分配の

正義ではなく過程型正義論を重視してきた。その姿勢はさらに明確になり、前著ではゴシュート部族を中心に意思決定過程が分析されていたのにたいして、本書では、マジョリティの側が何をどう視たか（視なかったか）の過程が意識的に描かれる。先住民社会が法律や契約のルールを守ることを重視しながら多様性と持続可能性を求め続けている姿を丁寧に向うことで、なぜ、その世界が理解不可能だと思われてきたのかを、問い直すのである。

当たり前のことながら、可視化において重要なのは、視られる（視られない）側ではなく、視る（視ない）側である。過程の正義は、誰に敬意が払われ、何が評価された（されなかった）か、という認識の正義を確認し続けなければ、形骸化してしまう。本書は、それを具体的に示すとともに、私たちがなぜ視ないのかを問い直し、「どうにもできない」と感じていたことに新たな光をあてる。

西部劇にも反映されるヒロイズムは、格闘と犠牲の上に成り立つ勝利を正義と同一視し、物語を勝利の瞬間で終えることで、倒されたものを画面から消してきた。似たように、現代社会

は「弱者を周縁化し、抑圧するシステム」につながりやすい（p.219）。

環境正義は、「正義」が単純化・形骸化される過程を可視化し、批判的に分析し続けるという、不断の自省をともなう運動である。近代社会が視ることを恐れてきたものとは何だったのだろうか。環境正義を問い、実践するための案内役として、本書が果たす役割は貴重である。（石山徳子著『「犠牲区域」のアメリカ——核開発と先住民民族』岩波書店、2020年9月、xii + 249 + 35頁、定価3,850円（税込）

（ふじかわ・けん 明治学院大学社会学部教授）

#### 【引用文献】

- 船橋晴俊・長谷川公一・飯島伸子編（1998）『巨大地域開発の構想と帰結：むつ小川原開発と核燃料サイクル施設』東京大学出版会
- 倉沢治雄（1988）『原子力船「むつ」：虚構の航跡』現代書館
- Schlosberg, D. (2007) *Defining Environmental Justice: Theories, Movements and Nature*, Oxford University Press.
- Walker, G. (2012) *Environmental Justice: Concepts, Evidence and Politics*, Routledge.